Ⅱテサロニケ１章１－４節

１．恵みと平安１－２

今日からⅡテサロニケの講解説教が始まります。この第2の手紙は、第1の手紙が書かれてから数か月後に書かれました。第2の手紙が書かれた理由は、第1の手紙で教えた主の再臨について、ある人たちが誤解して受け留めているとの知らせが、パウロに伝えられたからです。パウロはその誤解を解き正しい教えを伝えるために、さらに迫害下にある教会を励まし、怠惰な歩みをしている人たちを戒めるためにこの手紙を書きました。手紙のアウトラインは、1章は迫害下にある教会への励まし、2章は主の日に対する正しい教え、3章は怠惰な歩みをしている人たちへの戒めとなっています。ではこれから手紙の本文を見ていきましょう。

「パウロ、シルワノ、テモテから、私たちの父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ。」第1の手紙と同様、差出人はパウロ、シルワノ別名はシラス、そしてテモテです。実際にはパウロがこの手紙を書いています。シルワノ即ちシラスとテモテは第2次伝道旅行の際パウロに同行し、テサロニケ伝道に加わりました。しかし3週間ほど伝道した時、ユダヤ人たちによる迫害が起こり、パウロたちはテサロニケを去らなければなりませんでした。アテネまで来た時、パウロはテサロニケ教会を励ますためにテモテをテサロニケに送りました。その間パウロたちはアテネからコリントに来て、コリント伝道を始めていました。そこにテモテが戻って来て、テサロニケ教会の良い知らせを伝えました。そこでパウロはテサロニケ教会を励ますために第1の手紙、続けて第2の手紙を書いたのです。

第1の手紙では宛先が「父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ」となっているのに対し、第2の手紙では「父なる神」の前に「私たちの」が付き、「私たちの父なる神」となっています。「私たちの」が付けられることによって、父なる神と私たちの関係が強調されています。私たちは父なる神の子どもであるということです。神の子どもなので私たちは天地の創造者を「父なる神」と呼ぶ神との親しい関係を持つようになったのです。そしてそれは主イエスを信じる信仰を通して与えられました。ヨハネ1:12「しかし、この方を受け入れた人々、即ちその名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。」主イエスを信じることによって神の子どもとなる特権が与えられていることを覚えて、今日も私たちの父なる神に感謝しましょう。

もう一つ覚えたいことは第1の手紙でも覚えましたが、教会とは父なる神と主イエス・キリストにある群れだということです。「…にある」と言うことばは英語ではinで、「…の中にある」という意味です。すなわち教会とは父なる神と主イエス「の中にある」存在なのです。すなわち教会は、神の支配、神の救い、神の守りと祝福の中に、神の国の中にあるのです。どんなにすばらしい集まりであっても、父なる神と主イエス「の外にある」なら、それは教会ではありません。教会は神の支配の中にある存在です。そして教会が神の支配の中にあるということは、教会に属する私たち一人ひとりも神の支配の中にあるということです。なぜなら教会とは神と主イエスによって救われた信徒一人ひとりの集まりだからです。私たちは今日も神と主イエスの御手の中にあり､神の支配、神の救い、神の守りと祝福の中にある神の国の一員です。

「私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。」第1の手紙と同じようにパウロはテサロニケ教会に恵みと平安を祈ります。違っている点は、第1の手紙では「恵みと平安があなたがたにありますように」となっているのに対し、第2の手紙ではその前に「私たちの父なる神と主イエス・キリストから」を付け加えています。その意味は、恵みと平安の根源は「私たちの父なる神と主イエス・キリスト」であり、恵みと平安は神と主イエスから私たちに与えられるということです。

恵みとは、受けるに値しない者に神が一方的に与えてくださる愛のプレゼント贈り物です。神の救いは一方的な神の恵みです。その救いを受け取る信仰も神の恵みによって私たちに与えられました。私たちのいのちも、健康も、生きるために必要なすべてのものも恵みによって与えられています。また平安は平和とも訳される言葉です。私たちは主イエスを信じる信仰により、神との平和をいただき、神の子どもとしての親しい神との交わりが与えられています。そして神は私たちの心に平安を与えてくださいます。パウロは迫害下にあるテサロニケ教会に「恵みと平安が父なる神と主イエス・キリストからあるように」と祈りました。神は私たちにもいつも恵みと平安を与えてくださるお方であることを覚えましょう。

２．信仰と愛 ３

3節では、パウロがテサロニケ教会を覚えて感謝しています。「3兄弟たち。あなたがたについて、私たちはいつも神に感謝しなければなりません。それは当然のことです。あなたがたの信仰が大いに成長し、あなたがたすべての間で、一人ひとりの互いに対する愛が増し加わっているからです。」パウロはここで「神に感謝しなければなりません。それは当然のことです」と言って、感謝の思いを強調しています。何を神に感謝しているのかというと、テサロニケ教会の信仰の成長と愛が増し加わったことです。テサロニケ教会はパウロの感謝の言葉を聞いて大いに励まされたことでしょう。

まず感謝の第一である信仰の成長を見ていきましょう。「あなたがたの信仰が大いに成長し」とあります。「大いに」のギリシャ語(ヒューペル)の言葉から英語のハイパーと言う言葉ができました。パイパーとは超越しているという意味で、パイパーレスキュー隊は特別救助隊と呼ばれ、特別な救助活動ができる部隊です。また超特急というと、特急よりもさらに早い特急ですが、テサロニケ教会はまさに超成長していたのです。ではなぜテサロニケ教会は短期間で大いに成長したのでしょうか。第1の手紙の1:6にその答えがあります。「あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちに、そして主に倣う者となりました。」まず彼らの信仰は「多くの苦難の中で」成長したということです。人生の試練は信仰が弱まる誘惑とも、信仰が成長する訓練ともなります。テサロニケ教会は苦難を神の訓練として受け留めたので信仰が成長しました。次にみことばによる成長です。彼らは「聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ」ました。そのみことばが彼らの信仰を養い、信仰が成長しました。もう一つは模範に倣って実践したことです。彼らはパウロたちにそして主に倣う者になり、みことばを実践したのです。私たちも苦難の中に置かれても、神の訓練と受け留めることによって信仰が成長します。またみことばに養われ、兄弟姉妹や主の模範に倣って実践する時に、ゆっくりであっても信仰の成長をすることができるのです。

パウロの感謝の第2は彼らの愛の増加、愛が増し加わったことです。「あなたがたすべての間で、一人ひとりの互いに対する愛が増し加わっているからです」とあります。愛の増加はまず「あなたがたすべての間で」とあり、教会全体に愛が増し加わりました。テサロニケ教会は愛の教会だと言えるのです。もう一つは「一人ひとりの互いに対する愛」とあるので、個人レベルでの愛の増加です。一人の信徒がもう一人の信徒に個人的に愛を示しているということです。第1の手紙1:3に「愛から生まれた労苦」と言う言葉がありました。教会の信徒一人ひとりは迫害の中でそれぞれ大変でした。しかし彼らは自分のことで精いっぱいになるのではなく、互いに助け合ったのです。そしてその愛は増し加わっていきました。

信仰の成長と愛の増加には相関関係があります。信仰は木の根の部分､愛は果実の部分です。信仰が成長すると愛の実をますます結ぶことができるのです。私達も信仰の成長と愛が増し加わる教会となりましょう。

３．忍耐と信仰 ４

「ですから私たち自身、神の諸教会の間であなたがたを誇りに思っています。あなたがたはあらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保っています。」パウロはテサロニケ教会を誇りに思っていると伝えます。テサロニケ教会は諸教会の間でパウロにとっての自慢の教会だったのです。このパウロの言葉もテサロニケ教会にとって大きな励ましになったに違いありません。では何を誇っているのかというと、彼らの忍耐と信仰です。忍耐と信仰の関係は、3節の愛と信仰の関係と似ています。愛は信仰の結ぶ実であるのと同様に、忍耐も信仰の結ぶ実なのです。「あなたがたはあらゆる迫害と苦難に耐えながら」とあるようにテサロニケ教会は様々な迫害と苦難を現在進行形で受けているのです。その中で信仰によって忍耐を働かせて耐えているのです。

信仰は苦難の中でも神を見上げ、神に信頼する力を与えてくれます。もし苦難だけを見ていれば、私たちは途中で音を上げてしまい、耐えることができなくなるでしょう。しかし、クリスチャンは苦難によって先が見えなくなっても、信仰によって天を見上げれば、神とイエスが私たちとともにおられることを知るのです。さらに、神が私たちの状況をよく知っておられ、苦難を通して信仰の成長のために訓練してくださっていること、また必要な助けを与えてくださり、試練と共に脱出の道を備えてくださっていることを知るのです。その信仰が苦難の中で私たちに忍耐を生み出すのです。テサロニケ教会はあらゆる迫害と苦難に耐えながら、信仰と忍耐を保ちました。信仰は忍耐を生み、忍耐の実はさらに信仰を成長させていきました。

日本では幸いにも現在は信仰ゆえの迫害はありません。けれども、個人的には信仰ゆえの苦難を経験することもあるでしょう。あるクリスチャンの証しを読みました。その人は会社の中で仕事が認められて取締役になったそうです。しかしまもなく社長から会社を取るのか教会を取るのかと迫られたそうです。今までどおり教会生活を大切にする行動を取ると、すべての責任ある仕事を取り上げられたのです。その人は8か月忍耐して祈っていると、ある時社長が自分の机の中にあった昔の社内報を読んだそうです。そこにはなんと20年前に書いたその人の信仰の証しが書いてありました。それを読んだ社長はその人が昔から信仰をもって良い仕事をしていたことを知り、再び責任ある仕事を任され、さらに昇進したとのことでした。忍耐をもって祈っていた時に、神は脱出の道を与えられたのでした。その人は現在はいのちのことば社の理事をしておられます。そのような信仰の証しに私たちも励まされます。

神は私たちにもいつも恵みと平安を与えてくださる私たちの父なる神です。苦難の中でも主イエスに対する信仰を成長させてくださり、愛と忍耐の実を結ばせてくださいます。そのような恵みを受ける神の子どもとされている私たちであることを覚えましょう。そして、信仰と愛と忍耐を働かせて、日々の生活を感謝をもって歩んでいきましょう。

Ⅱテサロニケ１章５－１０節「感嘆の的」

１．神の国のため５

先週からⅡテサロニケの講解説教が始まりました。1章は迫害下にあるテサロニケ教会への励ましが記されています。先週の箇所でパウロは、迫害の中にあってもテサロニケ教会が大いに成長していることを神に感謝し、さらには忍耐と信仰を保っていることを誇りに思っていると伝えて、励ましました。今日の箇所は苦しみの意味について教えています。

「それは、あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠です。あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。」5節では2回、神の国という言葉が出てきます。神の国とはマタイの福音書では天の御国と呼ばれていますが、同じことです。神の国は地上の国ではありません。国はもともと「支配」を意味する言葉で、神が支配される領域のことです。そして神が支配する神の国には神がおられ、救われ人たちが入ることができます。ヨハネ3章でイエスはニコデモに言いました。「人は新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」「人は水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。」即ち、イエスを主と信じ、聖霊によって神の子どもとして新生した人が神の国に入り、神の国の一員となることができるのです。

また神の国には「すでに」と｢いまだ｣の二つの面があります。「すでに」とは、神の国はすでに神の救いを受けた人の中に始まっていることです。ルカ17:21でイエスは言われました。「見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。」教会は完全ではありませんが、神の国がすでに始まっていることをその交わりの中に見ることができます。もう一つの面は、「いまだ」神の国は来ておらず、将来現れるということです。今日の箇所でも神の国の両面を見ることができます。

さてパウロは5bで「あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです」と言って、テサロニケの兄弟姉妹が迫害の苦難を受けている理由を述べています。彼らはイエスを信じ、神の子どもとして新生した時に、すでに神の国の中に入り、神の国の一員となりました。その結果、神の国のために苦しみを受けるようになったのです。ピリピ1:29にはこうあります。「あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。」ですから、神の国のために苦しむとは、キリストのために苦しむことです。キリストを信じない人が、キリストを信じる者を嫌って苦しめることが起きるのです。イエスご自身がこの世で嫌われ、苦しみを受け、十字架で死なれたことを覚えれば、イエスに従う者がこの世の人から迫害を受けることも当然起こり得るのです。

またパウロは5a でもう一つの苦しみの理由を述べています。それは「あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠」となることです。テサロニケの兄弟姉妹はあらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保ちました。その忍耐と信仰は、やがて現れる神の国にふさわしい者と認める証拠となるのです。神の正しいさばきとありますが、このさばきは将来の最後の審判における神の正しいさばきのことです。私たちはなぜ神の正しいさばきが今すぐに行われないのかと考えます。テサロニケのクリスチャンも思ったことでしょう。なぜ自分たちを迫害する者を神はさばかれないのかと。旧約聖書にも、なぜ神は正しい者が苦しみ、悪者が栄えるのかというテーマがあります。それに対する答えは、神は将来必ず正しいさばきをなさるということです。そしてパウロは将来の神の正しいさばきの時には、今の苦しみの中での忍耐と信仰が、神の国にふさわしい者と認める証拠となると言って、励ましたのです。もちろん、迫害の中で忍耐と信仰を保つことが、天国に入る条件ではありません。天国に入る条件は、ただイエスを救い主と信じる信仰だけです。迫害の中で忍耐と信仰を保つことは、その人が救われて神の国の一員とされている結果、結ばれた救いの実です。

私たちもイエスを信じ、神の子どもとして新生し、神の国の一員となると、信仰ゆえの苦しみを受けることがあります。クリスチャンでなければ受けることがないのに、クリスチャンになったばっかりに、人々からいろんなことを言われたり、信仰を反対されたりすることもあるでしょう。しかし、神は私たちにも忍耐と信仰を保つ力を与えてくださいます。そして、それは私たちにとっても、神の国にふさわしい者と認める証拠となるのです。ですから、私たちも信仰ゆえの苦しみを経験しても、来るべき新天新地という神の国に入る希望を持って、忍耐と信仰を保っていきましょう。

２．神のさばき６、８、９

神の正しいさばきである最後の審判の時には、二つのことが起こります。一つは神を信じない罪人に対する神のさばきです。もう一つはキリストの贖いによって罪を赦された人に対する神の救いです。そして神の正しいさばきは、イエス・キリストが再臨される時に行われます。第2の点では神のさばきを、第3の点では神の救いを見ていきましょう。まず神のさばきの面を見てみましょう。「6神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、」最後の審判においては、「あなたがたを苦しめる者には、報いとしての苦しみを与える」という逆転が起きます。

この神のさばきについて、8—9節でさらに詳しく教えています。「8主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に罰を与えられます。9そのような者たちは、永遠の滅びという刑罰を受け、主の御前から、そして、その御力の栄光から退けられることになります。」だれが神のさばきの対象となるでしょうか。それは神を知らない人々や主イエスの福音に従わない人々です。神を知らない人は、神に背を向けて自分勝手に生きています。そしてそれが聖書でいう罪なのです。最初の人アダムがこの罪を犯して以来、すべての人は神の前に罪人となってしまいました。罪人の私たちは神を知らず、信じず、神に逆らう悪を行います。神はその人たちをさばかれます。また主イエスの福音を聞いても信じず、従わない人たちも神のさばきを受けます。「あなたを救うために、あなたの罪を負い、あなたの身代わりにイエスは十字架で神のさばきを受けてくださった」という福音を聞いても信じないことは、神の前で罪なのです。

そしてその人たちに対する神のさばきは、永遠の滅びです。永遠の滅びとは永遠のいのちの反対です。永遠のいのちは神との親しい交わりに永遠に生きるいのちです。それはイエスを信じた時から始まり、天国において永遠に続きます。一方、永遠の滅びは、永遠に神との交わりが失われるのです。ですから9節で、永遠の滅びの刑罰とは、主の御前から、そしてその御力の栄光から退けられることだと教えています。ある人は言うかもしれません。「今、神とイエスを知らず、信じなくても、何の不自由もなく暮らしているので、永遠に神から退けられても問題ない」と。しかしそれは違います。今この世では、神はご自分を信じる人にも信じない人にも等しく、太陽の恵みも雨の恵みも、その他私たちが生きるために必要な多くの恵みを与えてくださっているのです。神から退けられることは神の恵みからも退けられることです。それは私たちにとってどんなに苦しいことになるでしょうか。

また「神が愛ならどうして永遠の滅びというさばきをされるのか」という人もいるでしょう。確かに神は愛なるお方ですが、同時に聖なるお方であり、罪を徹底的に嫌われます。ですから、聖なる神は罪人をさばかれるのです。しかし、神は罪人の私たちを愛する愛なる神なので、私たちが永遠の滅びに至ることがないように、救い主イエスを与えてくださったのです。ヨハネ3:16にはそのことが教えられています。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」神の私達に対する願いは、永遠の滅びではなく永遠のいのちを持つことです。そのことを第3の点で見ていきましょう。

３．神の救い７、１０

「 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。」神の正しいさばきの時には、この世で信仰のために苦しめられている人には報いとして安息が与えられるという逆転が起こります。燃える炎とは神の栄光の現れです。主イエスは神の栄光をもって、力ある御使いと共に天から現れます。イエスはこの時の御使いの働きをマタイ24:31でこう教えられました。「人の子は大きなラッパの響きと共に御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで四方から、人の子が選んだ者たちを集めます。」イエスが再臨される時、キリストにある死者はよみがえり、生きているクリスチャンと共に御使いたちによって集められ、空中に引き上げられて、主イエスと会うのです。そしてイエスと共に永遠の神の国に入れられ、いつまでも主とともにいることになります。

10節には、その時のクリスチャンの感動、感激が記されています。「10その日に主イエスは来て、ご自分の聖徒たちの間であがめられ、信じたすべての者たちの間で感嘆の的となられます。そうです、あなたがたに対する私たちの証しを、あなたがたは信じたのです。」私たちの朽ちたからだが栄光のからだに変えられてよみがえり、天にいる魂と再び結ばれ、空中に引き上げられ、イエスとお会いする時、言葉にならない感動、感激を覚えることでしょう。そして、主イエスのすばらしさを覚え、イエスは私たちにとって感嘆の的となり、主を心からあがめ、ほめたたえます。さらに永遠の神の国、新しい天と新しい地に入る時、私たちの地上での苦しみはすべてなくなり、真の安息を得ます。私たちは来るべき神の国において、永遠のいのちの救いのすばらしさを完全に知ることができるのです。この神の救いをいただくのは、ただ聖書の福音を信じ、イエスを自分の救い主と信じたことによるのです。「そうです、あなたがたに対する私たちの証しを、あなたがたは信じたのです」とあるとおりです。パウロは、このすばらしい神の正しいさばきの逆転があることを伝えて、迫害下にあるテサロニケ教会を励ましました。

この世は矛盾に満ちています。正しいことが行われず、悪がはびこる現実があります。神が正しいのなら、なぜ今正しいさばきがなされないのかと思うこともあるでしょう。しかし、必ず神の正しいさばきが主イエスの再臨の時に行われるのです。それは私たちにとって希望であるとともに警告でもあります。神の前に出た時にあなたは大丈夫なのかという警告です。すべての人に対する神の願いは、永遠の滅びではなく永遠のいのちです。その永遠のいのちの救いを与えるために、主イエスは尊い命を十字架でささげてくださいました。ですから、共に主イエスを信じ、神の国の一員とされ、神の国にのために生きる者、必要ならば神の国のために苦しみを受ける者ともなりましょう。そして、やがてイエスが再臨される時には、イエスを私たちの感嘆の的とし、救いの感動をもって主をほめたたえる者となりましょう。

Ⅱテサロニケ１章１１－１２節「召しにふさわしい者」

１．召しにふさわしい者 11a

1章は、迫害下にあるテサロニケ教会へのパウロの励ましが記されています。今日の箇所はパウロの祈りです。「11aこうしたことのため、私たちはいつも、あなたがたのために祈っています。」こうしたこととは、今までパウロが述べてきたことで、迫害下にあるテサロニケ教会への励ましの内容です。パウロはテサロニケ教会に励ましの手紙を書くだけでなく、いつも彼らのために祈っていました。パウロは本当にいつも祈っていたので、「私たちはいつも、あなたがたのために祈っています」と書くことができたのです。テサロニケの兄弟姉妹にとって、自分たちのためにパウロがいつも祈っていることを知ることほど、大きな励ましはなかったことでしょう。テサロニケ教会は孤立して孤独の戦いをしていたのではありませんでした。パウロを初めシルワノ、テモテという祈りの応援団がいたのです。そして、その祈りを神は聞き、テサロニケ教会の信仰が大いに成長し、愛が増し加わっていました。私たちも自分の家族や知人のために、主にある兄弟姉妹のために、さらには宣教師とその家族、諸教会のために祈る者となりましょう。神は私たちの祈りを用いて、祈る相手を励ましてくださいます。

さてパウロはテサロニケ教会のためにこの時、何を祈っているでしょうか。祈りの内容を3つに分けて見ていきます。第一の点では、彼らが召しにふさわしい者となることを祈っています。「11bどうか私たちの神が、あなたがたを召しにふさわしい者にし」てくださいますように。私たちがクリスチャンになったのは、自分の自由意思でイエスを自分の個人的な救い主と信じたからです。「主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われます」(使徒16:31)とあるとおりです。一人ひとりがイエスを信じることによって私たちは救われます。クリスチャンホームの子どもたちも、自動的にクリスチャンになるのではありません。自分の意思で、イエス様が私の罪のために十字架で死んでくださった救い主と信じるなら、救われてクリスチャンになることができるのです。

一方、私たちがクリスチャンになった後、聖書を通してわかることは、私たちが信仰を持つ前に、神が私たちを選び、私たちを救いに中に招いていてくださったから、即ち神の召しがあったから、イエスを信じて救われたということです。私自身も自分がイエスを信じてクリスチャンになった時のことを振り返ると、神の選びと召しがなければ、決して信じることができなかったと思うのです。ローマ8:30に「神はあらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました」とあるとおりです。

またその前のローマ8:28にはこうあります。｢神を愛する人たち、即ち、神のご計画に従って召された人たちのためには、すべてのことが共に働いて益となることを私たちは知っています。」後半の｢すべてのことが共に働いて益となる」のみことばに私たちは大きな励ましを受けますが、今日は前半の言葉に注目したいと思います。｢神を愛する人たち」とは｢神のご計画に従って召された人たち」です。私たちは計り知れない神のご計画に従って召されたので、イエスを信じることができ、その結果、義と認められ、神を愛する人たちとなったのです。テサロニケの兄弟姉妹も神に召されたので、イエスを信じて、神を愛する人たちとなりました。そして、神の国の一員となったので、この神の国のために苦しみを受けるようになったのです。

パウロは召されたあなたがたが、召しにふさわしい者となることを祈りました。では召しにふさわしい者とはどのような人になることでしょうか。一言で言うならば｢キリストに似た者」となることです。Ⅰヨハネ3:2には｢私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています」とあります。ですから、完全な意味でのキリストに似た者となるのは、主の再臨の時に私たちが栄化され、栄光の姿に変えられる時です。一方で、義認から栄化までの間の聖化の段階での信仰の成長過程の中で、私たちは徐々にキリストに似た者に変えられていきます。召しにふさわしい者となるとはキリストに似た神の子どもとなっていくことです。そのために私たちはキリストが地上の生涯でよく祈られたように、私たちも祈ります。キリストが語られ、使徒たちが教えたみことばを私たちは聖書を通して聞きます。キリストが福音を宣べ伝え、人々を愛されたように、私たちも福音を伝え、愛の奉仕を行います。

けれども、召しにふさわしい者となることは、私たちの努力によって実現するのではありません。｢どうか私たちの神が、あなたがたを召しにふさわしい者にし」てくださいますようにとパウロが祈っているように、神がして下さるのです。私たちを召してくださった神が、私たちを成長させ、召しにふさわしい者にして下さるのです。私たちはその神の働きを信じて、自分にできることを行うのです。神が私たちに与えてくださる聖化の恵みを信じましょう。そして私たちもキリストに倣って自分ができること行い、聖化のみわざに参加していきましょう。

２．信仰から出た良い働き 11c

パウロの二つ目の祈りの内容は、善を求める願いと信仰の働きの実現です。｢また御力によって、善を求めるあらゆる願いと、信仰から出た働きを実現してくださいますように。」まず、｢善を求めるあらゆる願いの実現」をパウロは祈っています。クリスチャンになると神のみこころを行いたいと願うようになります。それは私たちが神の子どもとされたからです。クリスチャンになる前はそのようなことを考えたこともありませんでした。神のみこころは私たちが悪を行うことではなく、善を行うことです。その結果、私たちは悪を求めるのではなく、善を求めるように変えられました。私たちは聖書を通して、善と悪を見分ける知恵と判断力が与えられるようになりました。聖書が教える善と悪の基準を知ることによって、私たちは様々な状況の中で善と悪を見分け、善を求めるようにされます。テサロニケ教会も善を求めるあらゆる願いを持ちました。その願いは「御力によって…実現してくださいますように」とあるように、神の力によって実現するのです。神は、私たちが善を求めるあらゆる願いを実現するために、御力を与えてくださるのです。

もう一つは｢信仰から出た働きの実現」をパウロは祈りました。信仰とは私たちの頭や心の中にしまい込むものではありません。頭で理解し、心に与えられた信仰は、行動となって外に出ていくのです。それが｢信仰から出た働き」です。考えてみますと、教会の働きはすべて信仰から出ています。神への礼拝は信仰から出ています。信仰がなければ神を礼拝することはできません。福音を伝える伝道も信仰から出ています。聖書を学ぶ教育も信仰から出ています。神を中心とする交わりも信仰から出ています。神と隣人に仕える奉仕も信仰から出ています。会堂や敷地内の整備も信仰から出ています。そして「信仰から出た働き」はその前の｢善を求めるあらゆる願い｣とも一致します。教会の働きは、信仰から出た善を求める良い働きです。

来週は教会総会が行われ、活動報告、活動計画、予算の審議、役員や監事選出があります。これらもすべて信仰から出ている働きです。信仰から出た良い働きの実現こそ教会の活動そのものなのです。そして信仰から出た良い働きの実現も、神の御力によって可能となるのです。教会活動の実現は神の御力によって可能となることを覚えましょう。そして私たちも「御力によって、善を求めるあらゆる願いと、信仰から出た働きを実現してくださいますように」と祈りましょう。そして神の力を信じて、信仰から出た良い働きを行いましょう。

３．御名があがめられるために12

パウロの三つ目の祈りは、御名があがめられることと、テサロニケの兄弟姉妹が栄光を受けることです。「12それは、私たちの神であり主であるイエス・キリストの恵みによって、私たちの主イエスの名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあって栄光を受けるためです。」まず「主イエスの御名があがめられるために」との祈りを見てみましょう。クリスチャンは神の栄光を現すことを人生の目的として与えられました。ですから「御名があがめられますように」と祈りますし、食べるにも飲むにも何をするにも、すべて神の栄光を現すことを願って行います。それはクリスチャンの個人生活においてもそうですが、教会においても同じです。パウロは「私たちの主イエスの名があなたがたの間であがめられ｣ることを祈っています。あなたがたの間で、即ち教会の交わりの中でです。クリスチャンは個人的に神の栄光を現すために召されているだけでなく、教会の交わりの中で神の栄光を現すために召されているのです。

ですから個人デボーションで主イエスの御名をあがめるだけでなく、教会の礼拝に集い、共に主イエスの御名をあがめます。共に主を賛美し、祈りをささげ、みことばを聞き、聖餐を受けることを通して、私たちは主イエスの御名をあがめます。伝道や教育や交わりや奉仕の中で、主イエスのために働き、学び、交わることを通して、教会として主イエスの名をあがめます。御名をあがめることは、クリスチャン個人の目的であると同時に教会の目的でもあります。そして、この二つは切り離すことができず、一つのことの両面なのです。なぜなら今年のみことばにあるように「あなたがたはキリストのからだであって、一人ひとりはその部分」だからです。テサロニケ教会が迫害を受けながらも成長できたのは、共に集って、神を礼拝したからです。礼拝でみことばを聞き、賛美し、交わることで、彼らの信仰は励まされ、燃やされ、証し人として遣わされました。そしてそのことも神の恵みによって可能となったのです。「私たちの神であり主であるイエス・キリストの恵みによって、私たちの主イエスの名があなたがたの間であがめられ」とあるとおりです。私たちも主の恵みによって共に集い、主の御名をあがめ、信仰の励ましをいただいて、主の証し人として遣わされましょう。

もう一つの祈りは「あなたがたも主にあって栄光を受けるためです。」これは主の再臨の時に私たちが栄化され、完全にキリストに似た者とされ、栄光を受けることです。「あなたがたも」と言っているように、テサロニケの兄弟姉妹だけでなく、主にあるすべての兄弟姉妹が主の再臨の時には、恵みによって栄光を受けるのです。第1の点で引用したローマ8:30に「神はあらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました」とあるとおりです。さらに栄化の前の聖化の段階にも、私たちはキリストの栄光を反映させながら、キリストに似た者に徐々に変えられていきます。

私たちも神の恵みと御力によって、召しにふさわしい者とされ、信仰から出た良い働きを行い、教会の交わりの中で御名をあがめ、共に栄光を受ける者となりましょう。

Ⅱテサロニケ２章１－７節「だまされてはいけない」

１．間違った主の日の教え １－２

NHKの夕方の首都圏ニュースの中に｢ストップ詐欺被害私たちはだまされない」というコーナーがあります。毎回詐欺がだます手口を伝え、だまされないようにと注意を促すコーナーです。詐欺にだまされないように私たちも注意しなければなりませんが、今日の聖書の箇所は、間違った主の日の教えにだまされてはいけないと教えています。パウロはテサロニケ教会からの知らせで、主の日についての間違った教えがテサロニケ教会に伝わり、ある人々に動揺が起きていることを知りました。そこで2章において、間違った主の日の教えにだまされないようにと注意を与え、正しい主の日の教えを伝えたのです。

「さて兄弟たち。私たちの主イエス・キリストの来臨と、私たちが主のみもとに集められることに関して、あなたがたにお願いします。」主の日とはどのような日のことでしょうか。主の日には2つのことが起こります。一つは「私たちの主イエス・キリストの来臨」です。これは主イエスの再臨のことです。主イエスの地上への来臨は2回あります。1回目は初臨と言われ、2千年前に子なる神が聖霊によっておとめマリアに身ごもり、人となって生まれたことです。そして2回目の来臨が、主イエスが再びこの世に来られる再臨です。主の日とはイエスの再臨の日のことを指しています。

そして主の日にはもう一つのことが同時に起こります。それは「私たちが主のみもとに集められること」すなわちクリスチャンが主のみもとに引き上げられることです。このことについては第1の手紙4:16—17でパウロが次のように教えました。「16すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、17それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」キリストが再臨される時、まずキリストにある死者が復活します。そしてその時生きているクリスチャンと共に引き上げられ、空中で主とお会いするのです。このことを携挙または空中携挙と言います。主の日とはイエスの再臨、復活、携挙が起こる日なのです。

そしてパウロはこの主の日のことに関して、2節でテサロニケの兄弟姉妹にお願いしています。それは彼らのある人たちが間違った主の日の教えを聞いて動揺していたからです。「2霊によってであれ、ことばによってであれ、私たちから出たかのような手紙によってであれ、主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いても、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。」「霊によって」とは偽預言者の預言です。彼らは聖霊に示されたと言って間違った主の日の教えを伝えました。「ことばによって」とはうわさ話です。そして「私たちから出たかのような手紙によって」とはさもパウロが書いたような手紙が回覧されていたのです。そして偽の預言やうわさ話や手紙によって伝えられた間違った主の日の教えとは、主の日がすでに来たという教えです。主の日がすでに来たとは、主はすでに再臨され、救われた民はすでに天に引き上げられたということです。

レフトビハインドという小説には同じようなことが書かれています。ある日、突然多くの人がいなくなってしまったのです。そして残された人たちに混乱が起こりました。残された人の中には牧師もいました。そして分かったことはイエスが再臨され、救われていた人はみな携挙したことです。ということは地上に残された人は牧師を初め救われていなかったということです。これは小説です。一方、テサロニケ教会では間違った主の日の教えを信じた人たちは、自分たちは救われていなかったので携挙されなかったのかと考え、落ち着きを失ったり、心を騒がせたのです。それに対してパウロはそのような教えは間違った教えなので、「主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いても、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください」と注意を促したのです。

今日は、聖書の時代よりもはるかに多くの情報を伝える手段があり、間違った教えも広まりやすい時代です。異端の教えの特徴は、聖書の教えの中に間違った教えが紛れ込んでいることです。すべてが間違っているのであれば、間違いに気づきやすいですが、正しい教えの中に間違った教えが紛れ込んでいるので見分けが付きにくいのです。銀行員はいつも本物の紙幣を扱っているので、その中に偽札があると本物との違いが分かり、偽札に気づきます。聖書の教えも同じです。間違いに気づくためには本物の聖書の教えをよく知ることです。そこでパウロも次に正しい主の日の教えを伝えます。そのことを第2、第3の点で見ていきましょう。

２．正しい主の日の教え ３－４

パウロは3節で主の日が来る前に起こる前兆について教えています。そしてこの前兆が起こっていないので、主の日がまだ来ていないことを教え、だからだまされてはいけないと注意を促しています。「3どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。」主の日が来る前の前兆の一つは背教が起こることです。背教とは、間違った福音を教えられたり、迫害を受けた結果、人々が信仰から離れることです。教会の内側から福音を否定し、神とキリストに背く人たちが出てくるのです。偽キリストや偽預言者が多く現れ、教会内の人々を惑わす結果、信仰から離れる人々が出てくるのです。

もう一つは「不法の者」の出現です。不法の者とは神のことばに徹底的に逆らう者で、主の日の前に現れます。Ⅰヨハネでは「反キリスト」、黙示録では「獣」と呼ばれる存在です。また神のさばきを受けて滅びることが定まっているので、「滅びの子」と呼ばれます。4節ではさらに詳しく不法の者について説明しています。「4不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」不法の者は高慢になり、自分こそ神であると宣言し、まことの神を退けてこの世界を支配しようとします。黙示録13:8には「屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな、この獣を拝むようになる」とあり、また同じ13:16－17には獣は自分を拝む者に獣の刻印を受けさせ、「その刻印をもっている者以外は、だれも物を売り買いできないようにした」とあります。そのようにして不法の者は自らを神と宣言してこの世界を支配し、イエスを主と信じる者を迫害します。同じ黙示録13:10には「ここに、聖徒たちの忍耐と信仰が必要である」とあります。

パウロは主の日の前兆である背教も不法の人の出現もまだ起きていないので、主の日はまだ来ていないと教えたのです。このパウロの正しい主の日についての教えに、テサロニケ教会はどんなに励まされたことでしょうか。教会の歴史の中で主の再臨についての間違った教えが度々教えられてきました。最近では韓国のある異端が1992年10月28日にキリストが再臨され携挙が起こると預言し、当日多くの信者が主の再臨を待ち望みましたが、結局携挙は起こらず、その団体は解散しました。「どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません」とパウロが教えたように、私たちも間違った終末の教えにだまされないように気をつけましょう。

３．すでに働く不法の力 ５－７

パウロは5節で「私がまだあなたがたのところにいたとき、これらのことをよく話していたのを覚えていませんか」と言っています。すなわちパウロはテサロニケ滞在中に主の日についての正しい教えをすでに話していたのです。ところが彼らはパウロの教えを忘れてしまい、間違った教えに動揺したのでした。私たちも一度聞いてもすぐ忘れてしまいます。ですから、何度も学び続ける必要があるのです。繰り返し繰り返し聖書を読み、学ぶことによって、本物の信仰が身に付くのです。さらにパウロは福音を伝える時に、キリストの再臨まで含めて教えていたことがわかります。私たちも礼拝の中で使徒信条をもって信仰を告白しますが、その中にも「そこから来られて生きている者と死んでいる者とをさばきます」とあり、キリストの再臨が告白されます。使徒信条は元々初期の教会において洗礼を受ける人たちが告白すべき基本的な信仰をまとめたものです。洗礼準備の際に使徒信条を用いて学び、洗礼の時に使徒信条を告白しました。私たちも主の日の教えは福音の大切な教えであることを覚え、正しい主の日の教えを知る者となりましょう。

次の6節、7節は解釈が難しい箇所です。「不法の者がその定められた時に現れるようにと、今はその者を引き止めているものがあることを、あなたがたは知っています。不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。」不法の者は神が定めた主の日の前の終わりの時に現れます。そして、今はまだ不法の者が現れないのは、その者を引き留めているもの(者)があるからだというのです。そして引き留めているもの(者)が取り除かれる時に、不法の者が現れるのです。では不法の者が今現れないように引き留めているもの(者)とは何のことでしょうか。6節のひらがなの「もの」は原語では中性名詞なので広い意味でのものです。一方7節の漢字の「者」は原語では男性名詞なので人格的存在です。この「引き留めているもの(者)」が一体何なのか、パウロは「あなたがたは知っています」と言ってテサロニケ教会には教えていると言っています。しかし、ここではそれが何かを書いていないので、私たちにははっきりわかりません。いろいろな解釈がありますが、何かはわからないと理解するのが良いと思います。一方でわかることは、神が不法の者の出現の時も、その後のキリストの再臨の時も支配しておられるということです。ですから、私たちがわからなくても、神の時を信じて待ち望むことが大切なのです。

さらにパウロは7節で「不法の秘密はすでに働いています」と言っています。すなわち、終末時代に現れる究極の不法の者はまだ現れていないけれども、不法の力はすでに働いていると言っているのです。Ⅰヨハネ2:18にはこうあります。「幼子たち。今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今が終わりの時であると分かります。」主の日の前に現れる究極の反キリストはまだ来ていないが、キリストを否定する多くの反キリストはすでに現れているということです。2千年前に主イエスが来られた時から、終わりの時はすでに始まっています。けれども究極の反キリスト、不法の者が現れる、主の日の前の大患難時代はまだ始まっていないのです。

今日の説教題は「だまされてはいけない」ですが、今や多くのイエスを主と告白しない反キリストが私たちを惑わすために現れています。「どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません」というみことばは、今日の私たちにも語られています。だまされないためには、正しい本物の聖書の教えをよく知る以外にありません。繰り返し繰り返しみことばを学び、みことばの真理に生きる者となりましょう。そして真理のみことばを伝える者となりましょう。

Ⅱテサロニケ２章８－１２節「救いの真理」

１．不法の者とサタン ９－１０a

先週は2:1-7から、主の日がすでに来たという教えにだまされてはいけないというパウロの教えを見ました。そしてその理由の一つとして不法の者と呼ばれる反キリストがまだ来ていないことが挙げられました。今日の箇所では先週の箇所に続いて3つのことを見ていきます。第1の点では不法の者とはだれなのかについて見ていきましょう。

「不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。」「不法の者は、サタンの働きによって到来し」とあるので、不法の者を知るためには、まずサタンのことを知る必要があります。昨年来、統一協会について、先月にはエホバの証人についてその問題性が社会的に指摘されています。彼らは自分たちに反対する者を、サタンの側の者とかサタン呼ばわりします。しかし、彼らの教えは聖書の教えではありません。

では聖書はサタンとはどのような存在と教えているでしょうか。サタンとはヘブル語で「敵対者」を意味し、「神に敵対する者」です。サタンは新約聖書では悪魔とも呼ばれます。悪魔はギリシャ語で「告発者」を意味し、「神の民を訴える者」です。イエスはルカ10:18で「サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました」と言いました。悪魔はもともとは御使いでしたが、彼は高慢になり自分が神になろうとしたため、神の怒りを受け、天から落ちて堕落しました。それ以来、神に敵対し、人々をまことの神から引き離そうとして働いています。

蛇に変装したサタンはまず、エバを誘惑し、神が「食べてはいけない。食べると必ず死ぬ」と言われた善悪の知識の木の実を食べさせることに成功しました。エバはアダムにも勧め、アダムも善悪の知識の木の実を食べ、こうして最初の人アダムは神に逆らう罪を犯しました。その結果、アダムの子孫であるすべての人は生まれながら神に背く罪人となってしまい、悪魔の支配下に置かれてしまいました。救い主イエスは、悪魔の支配下にいる私たちを救い、神の国の中に入れるためにこの世に来て下さったのです。

さらに悪魔は信仰によって神に立ち返った者にも働きかけ私たちの信仰に疑いを投げかけて神から引き離そうとします。エペソ書では悪魔は「空中の権威を持つ支配者」と呼ばれ(2:2)、悪魔と共に堕落した悪霊を「この暗闇の世界の支配者たち」と呼んでいます(6:12)。悪霊はたくさんおり悪魔の子分として悪魔と共に働き、クリスチャンに霊的戦いを挑んできます。そこで、私たちは「悪魔の策略に対して堅く立つことができるように、信仰とみことばと祈りという神のすべての武具を身に着け」て、霊的戦いに勝利する必要があるのです。

そして、やがて終末の時が近づくと、悪魔の働きは激しくなります。先週も学びましたが、「不法の者」はヨハネの手紙では「反キリスト」と呼ばれ、ヨハネの黙示録では「獣」と呼ばれます。黙示録12:12には「悪魔が自分の時が短いことを知って激しく憤り、おまえたちのところに下ったからだ」とあります。悪魔は終末が近いことを知り、黙示録13章で不法の者・反キリストである獣と、偽預言者である別の獣を地上に送ります。偽預言者は不法の者こそ神であると人々に教え、不法の者は自分こそ神であると宣言し、「あらゆる力、偽りのしるしと不思議、10また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。」

黙示録13章には、不法の者である獣は自分に従う者に刻印を押し、刻印を持っている者以外は物を売り買いできないようにして、市場経済を支配します。そして自らを神とする一大帝国を地上に築き、自分を拝まない神の民を迫害します。これは主イエスが再臨される前の患難時代と呼ばれる期間の出来事です。2:6-7で先週見たように、今は不法の者を引き留めているものがあります。しかし、やがて終末の時には、神の許しの中でサタンが激しく働き、不法の者が現れるのです。しかし、不法の者も偽預言者もサタンも限られた期間だけ働くのであって、やがて神のさばきが下ります。第2の点で彼らに対する神のさばきを見ていきましょう。

２．不法の者の滅び ８

第2の点では不法の者の滅びについて見ていきましょう。「8その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。」その時、即ち、神の支配の中で、不法の者を引き止めている者が取り除かれる時、不法の者が現れ、人々を惑わし、自分を神とする地上の帝国を築きます。しかし、その後主イエスが再臨され、不法の者と偽預言者をさばき、滅ぼされます。そして、最後にサタンも神のさばきを受けて滅ぼされます。

「主イエスは彼を御口の息をもって殺し」とあります。御口の息とは主のみことばです。神のことばには力があります。天地創造の時、「光、あれ」と言われると光ができました。その後、神のことばによって次々と天地が創造されました。イエスは中風の人に「あなたの罪は赦された」と言い、さらにイエスが罪を赦す権威を持っていることを示すために、「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい」と言うと、彼は癒され、寝床を担いで出て行きました。(マルコ2:1-12）また嵐のガリラヤ湖に向かって「黙れ、静まれ」と言うと嵐が静まり、凪になりました。(マルコ4:39)死んで4日経つラザロに向かって「ラザロよ。出て来なさい」と言うと、ラザロはよみがえり、墓の中から出てきました。主イエスのことばには計り知れない力があります。そのことばによって、イエスは不法の者を滅ぼされます。

また「来臨の輝きをもって滅ぼされます」とあります。1:7には「主イエスが、燃える火の中に、力ある御使いたちとともに天から現れる」とあります。燃える火の中、そして来臨の輝きとは再臨の時の主イエスの栄光の輝きです。その神の栄光は闇の力を滅ぼす力があるのです。主イエスはみことばと栄光の輝きをもって不法の者を滅ぼされます。不法の者が滅びの子を呼ばれるゆえんです。私たちにとっては、神に逆らうサタンもサタンと共に働く不法の者も偽預言者も神のさばきを受けて滅びることは良い知らせです。しかし、パウロはここでもしあなたが不法の者に従うならば、あなたも滅びに至ると警告を与えているのです。しかも先週もⅠヨハネ2:4で見たように、まだ究極の反キリストは現れていないが、今や多くの反キリストが現れているのです。Ⅰヨハネ2:22では「御父と御子を否定する者、それが反キリストです」とあります。神と主イエスの支配と救いのわざを否定する者は現代も多くいます。それらの教えに従うなら、あなたも滅びに至るという警告です。 第3の点でそのことを見ていきましょう。

３．滅びる者たち １０－１２

第3の点では不法の者に従う者の滅びについて見ていきましょう。まず不法の者とはだれなのかを「10また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。11それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽りを信じるようになります。12それは、真理を信じないで、不義を喜んでいたすべての者が、さばかれるようになるためです。」不法の者は悪の欺きをもって人々を惑わします。そして、だまされた人は「自分を救う真理を愛をもって受け入れ」ません。自分を救う真理とは主イエスの福音です。福音を信じず、むしろ偽りを信じるようになるのです。神の義を信じず、むしろ不義を喜ぶようになります。その結果、彼らは神のさばきを受けて、永遠の滅びに至るのです。そのため救いの真理を受け入れない人たちを滅びる者たちと呼んでいるのです。

11節で「それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽りを信じるようになります」とあります。これは神が彼らに偽りを信じさせたということではありません。ローマ1:23-24にはこうあります。「朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似た形と変えてしまいました。そこで神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡されました。」人間の側でまことの神に対して心が頑なになり、不信仰になったので、神は不信仰の思いに彼らを引き渡されたのです。私たちがいつまでも神と主イエスに対して心を頑なにしているなら、もはや信じることができなくなるという警告なのです。

神は私たちが滅びることなく、救われる者となるように、救いの真理を与えてくださいました。イエスはヨハネ14:6で言われました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」救いの真理とはイエスです。イエスだけが私たちの罪を赦し、父なる神のもとに私たちを導く唯一の道です。イエスだけが永遠の滅びではなく、永遠のいのちを与えてくださる救い主です。救いの真理であるイエスを愛をもって受け入れ信じるなら、私たちは救われるのです。これこそ聖書が私たちに伝えている福音です。

実はこの手紙を書いているパウロ自身が、以前は救いの真理であるイエスを信じず、イエスを信じるクリスチャンを迫害していました。熱心なユダヤ教徒であった彼は、クリスチャンを迫害することが神のみこころだと信じていました。しかし、クリスチャンを捕らえるためにダマスコに行く途上、復活のイエスのみ声を聴いたのです。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と言う声に対して「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、「わたしはあなたが迫害しているイエスである」との答えが返ってきました。そのことによって、パウロはイエスをまことの救い主、まことの神、まことの主であると信じ、主イエスの使徒と任命されて、今度は命がけでイエスの福音を伝える者となりました。

パウロだけでなく私たちも含めて、だれも最初から救いの真理であるイエスを信じている人はいません。すべての人は生まれながら神に背を向ける罪人であり、神とイエスを信じていないからです。しかし、神は羊飼いのいない羊のようにさまよう、神から離れた迷子の羊である私たちをあわれんでくださいました。そして、私たちが滅びの道に向かうことがないように、羊飼いであるイエスをお送りくださったのです。イエスは言われました。「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」(ヨハネ10:11)そのとおり、イエスは十字架でいのちを捨てて、私たちの罪を贖ってくださいました。ですから、偽りを信じず、真理なるイエスを信じましょう。主の再臨の時の来臨の輝きは滅びる者にはさばきとなります。しかし救われた者には、来臨の輝きは、主の栄光を反映させながら、主と同じ姿に変えられる救いの完成となるのです。これこそ私たちの望みです。その時を待ち望みつつ、主の恵みによって信仰と忍耐を保ちながら、忠実な主のしもべとして歩んでいきましょう。

Ⅱテサロニケ２章１３－１７節「神の救い」

１．神の救い １３－１４

今日の箇所は神の救いとはどのようなものなのか、また救われた者はどのように生きるべきかを教えています。まず13—14節で神の救いについて見てみましょう。「しかし、主に愛されている兄弟たち。私たちはあなたがたのことについて、いつも神に感謝しなければなりません。神が、御霊による聖別と、真理に対する信仰によって、あなたがたを初穂として救いに選ばれたからです。そのために神は、私たちの福音によってあなたがたを召し、私たちの主イエス・キリストの栄光にあずからせてくださいました。」13節は「しかし」から始まります。パウロは12節まで、不法の者、即ち反キリストと彼に従う者の滅びについて教えました。それに対して13節からテーマを滅びから救いに変えて、テサロニケの兄弟姉妹に与えられた神の救いを感謝しつつ教えています。この箇所から、神の救いとはどのようなものかを知ることができます。

神の救いは神の働きと人間の応答の両面があります。救いにおける神の働きは選びと召しです。それに対する人間の応答は信仰です。まず神の働きである選びと召しについて見ていきましょう。13節で「あなたがたを初穂として救いに選ばれたからです」とあります。さらに14節で「そのために神は、私たちの福音によってあなたがたを召し」とあります。ローマ8:30にはこうあります。「神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」私たちが信じる前に、神の計り知れない摂理の中で、神は私たちを救いに定め、選び、時至って召してくださったので、私たちは救われたのです。イエスはヨハネ6:44で言われました。「わたしを遣わされた父が引き寄せて下さらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできません。」またヨハネ15:16でも言われました。「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。」神の主権の下での選びと召しがあったので、私たちは救われたのです。

一方、救いにおける神の選びと召しは、私たち人間には隠されています。私たちの側で救われるために必要なことはただ一つ、イエスを自分の救い主と信じる信仰です。人間の応答としての信仰が神の救いを受けるために必要なのです。13節で「真理に対する信仰によって」とあるとおりです。救いの真理であるキリストの福音を信じることによって私たちは救われます。そしてそのためにはだれかが福音を伝えてくれる必要があります。すなわち人が救われるためには伝道が必要なのです。14節で「わたしたちの福音によってあなたがたを召し」とあるように、テサロニケの兄弟姉妹はパウロの伝道によって福音を聞き、信じて救われました。私たちもだれかが福音を伝えてくれたので、信じることができました。

さらにここでは神の救いの内容についても教えています。一つは13節の「御霊による聖別」です。御霊による聖別とは、イエスを信じて救われた者を、神は聖霊によってこの世から分けて神のもの、神の民としてくださったことです。もう一つは14節の「わたしたちの主イエス・キリストの栄光にあずからせてくだ」さったことです。Ⅱコリント3:18にあるように、神の前に義と認められた民は聖化の中で「主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて」いき、やがて栄化の救いの完成に至るのです。

このすばらしい神の救いをテサロニケの兄弟姉妹がいただいていることを覚えて、パウロは神に感謝しました。救いには神の選びと人間の信仰の両面があります。もし、自分でイエスを選んだだけなら、信仰が弱くなれば救いから離れてしまうかもしれません。しかし、私たちがイエスを選ぶ前にイエスが私達を選び、召し、救ってくださったので、たとえ私達の信仰が弱くなっても、神の救いは変わることはありません。私たちの手がイエスから放れそうになっても、イエスがしっかりと私たちの手を握ってくださっているので、救いから離れることはありません。神が責任をもって救いの完成に至らせてくださるのです。信仰生活の途中に何があっても、神が最後には私たちをキリストの栄光にあずからせてくださいます。それゆえ、私達も自分が救われていることを感謝するとともに、互いに救われていることを神に感謝しましょう。そして共に救いの確信をもって歩んでいきましょう。

２．みことばに堅く立つ １５

15-17節は救われた者がどのように生きるべきかを教えています。教会福音讃美歌181に「立て立て とわに変わらぬみことばを 信じ立て 神のみことばに立て」と歌われます。15節は救われた民は神のみことばに堅く立って歩むべきことを教えています。「15ですから兄弟たち。堅く立って、語ったことばであれ手紙であれ、私たちから学んだ教えをしっかりと守りなさい。」今教会芝生エリアの隣りで、平屋の細長いアパート建設が始まっています。牧師室からその進展を見ていますが、柱を立てる前にミキサー車が何台も来てコンクリートを流し、しっかりとした土台が造られました。その土台の上に建物が組み立てられています。私たちにも、信仰生活を全うするためにはしっかりとした土台が必要です。では私達の信仰生活を支える確かな土台とは何でしょうか。それがみことばです。パウロは15節で「語ったことばであれ手紙であれ」と言っています。パウロが語ったことばはさらに手紙によって書き記され、それがやがて新約聖書に入りました。私たちは今書かれたことばである旧新約聖書66巻を持っています。それが私たちの信仰生活を支え、私たちが固く立つ土台である神のことばです。

Ⅱテモテ3:16-17にはこうあります。「聖書はすべて神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となるためです。」私たちは旧新約聖書66巻が神の霊感によって書かれた神のことばと信じています。そしてこの神のことばである聖書は、教えと戒めと矯正と義の訓練に有益なのです。この神のことばに堅く立つなら、私たちはすべての良い働きに十分整えられた者となることができます。

さらに15節に「私たちから学んだことをしっかり守りなさい」とあります。みことばに堅く立つとは、単にみことばを学ぶだけでは不十分です。学んだことをしっかり守ることが必要なのです。それはイエスのたとえの中でも教えられています。岩の上に家を建てた賢い人の家は、嵐が来ても倒れませんでした。一方、砂の上に家を建てた愚かな人の家は、嵐が来ると倒れてしまいました。岩の上に家を建てた賢い人とは、イエスのことばを聞いてそれを行う人です。一方、砂の上に家を建てた愚かな人とは、イエスのことばを聞いても行わなかった人です。聞いただけ、学んだだけでは私たちも愚かな人になってしまいます。聞いて学んだことを守り行うなら、私たちは賢い人になることができます。みことばに堅く立つとは、みことばを学んで守ることです。私たちは聞いて学んだみことばを守り行う賢い人となって信仰生活を歩みましょう。

３．心を慰め強める神 １６－１７

16-17節はパウロの祈りです。その中でテサロニケ教会があらゆる良いわざとことばに進むことを祈っています。そして、そのためには彼らの心が慰められ、強められる必要があり、それを成してくださる神に祈っています。さらにその神とはどのようなお方かを語っています。16-17「16どうか、私たちの主イエス・キリストと、私たちの父なる神、すなわち、私たちを愛し、永遠の慰めとすばらしい望みを恵みによって与えてくださった方ご自身が、17あなたがたの心を慰め、強めて、あらゆる良いわざとことばに進ませてくださいますように。」主イエスと父なる神は聖霊なる神と共に三位一体の神です。その神とはどのようなお方でしょうか。まず神は私たちを愛してくださいました。神に背き、罪の中を歩む私たちには神に愛される何の理由もありません。神は一方的に無条件の愛をもって罪人の私たちを愛してくださいました。そしてご自身のひとり子イエスを救い主としてお与えくださったのです。

次に神はイエスを信じて救われた人に、「永遠の慰め」を与えてくださいました。永遠の慰めとはどういうことでしょうか。ハイデルデルベルク信仰問答の問１は神のくださる慰めについてです。問と答えの最初の部分をお読みします。問1「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。」答「私が私自身のものではなく、からだも魂も、生きるにも死ぬにも、私の真実な救い主イエス・キリストのものであることです。」私たちが生きるにも死ぬにも主イエスのものとされていること、即ち私たちが永遠に神の民とされ、神の救いの中にあることが永遠の慰めです。天の御国に入る時、神は私たちの目から涙をことごとくぬぐい去ってくださいます。天には永遠の慰めがあるのです。また地上にあっても神はご自分の民にいつでも慰めを与えてくださいます。Ⅱコリント1:4にはこうあります。「神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。」

もう一つは、神は私たちに「すばらしい望み」を与えてくださいました。天における望みは私たちがキリストの栄光に完全にあずかり、神と共に永遠に生きることです。また地上にあってはどんな状況の中でも希望を与えてくださることです。ローマ5:3—5にはこうあります。「苦難が忍耐を生みだし、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っています。この希望は失望に終わることがありません。」神学校で学んでいた時、ある先生から口語訳のことばで「患難、忍耐、練達、希望」と覚えておいたらいいと教えられました。患難が来たら、忍耐、練達、希望とつながっているので希望をもって歩むことができるということです。これは大きな励みになり、今でも覚えています。テサロニケ教会は迫害のなかで苦難を経験していました。しかし、苦難から忍耐、練られた品性、希望とつながっており、どんなときにもすばらしい望みが与えられているのです。しかも永遠の慰めもすばらしい望みも恵みによって神は私たちに与えて下さいました。

その神が「17あなたがたの心を慰め、強めて」くださるのです。苦難の中でも、失敗や挫折の中でも、神は私達の心を慰め強めてくださいます。そして私達の心が慰められ強められると、「あらゆる良いわざとことばに」進むことができるようになるのです。どんなに良いことをしても、一言の失言で良いわざが崩れてしまうことがあります。またどんなに良いことを言っても、それが実行されないなら何の意味もありません。私たちには良い言葉と良い行いの両方が必要なのです。しかし私たちは言葉と行いで失敗します。しかしそのような時にも、神は私たちの心を慰め、強めて立ち上がらせ、再びあらゆる良いわざとことばに進ませてくださるのです。私たちはこんなにもすばらしい救いをいただいています。そのことを神に感謝しましょう。そしてみことばに堅く立ち、神のくださる慰めと望みをいただき、心強められて、あらゆる良いわざとことばに進んで行きましょう。

Ⅱテサロニケ３章６－１５節「働くことの意味」

１．働くことの意味 ６－１０

Ⅱテサロニケの講解説教も今日と来週の２回となりました。Ⅱテサロニケでは、1章では迫害下にある教会への励まし、2章では主の日に対する正しい教えが伝えられました。今日の箇所は3章の中心テーマである怠惰な歩みをしている人たちへの戒めです。第1の点ではこの箇所から働くことの意味を学びたいと願っています。まず6節を見てみましょう。「6兄弟たち、私たちの主イエス・キリストの名によって命じます。怠惰な歩みをして、私たちから受け継いだ教えに従わない兄弟は、みな避けなさい。」ここでパウロは、私たちから受け継いだ教えに従わない怠惰な歩みをする兄弟たちがいると言っています。

ではここでパウロが言う「私たちから受け継いだ教え」とはどのような教えでしょうか。10節にその教えが記されています。「10あなたがたのところにいたとき、働きたくない者は食べるな、と私たちは命じました。」パウロはテサロニケ滞在中に「働きたくない者は食べるな」と教えていたのです。「働かざる者食うべからず」という格言は、このⅡテサロニケ3:10から出た言葉です。もちろん「働きたくない者は食べるな」は、病気や障害のために働きたくても働けない人のことではありません。また次の仕事を探している最中の人のことでもありません。高齢になり年金生活をしている人のことでもありません。家事や育児など収入がなくても大切な働きをしている人のことでもありません。「働きたくない者は食べるな」とは、働けるのに怠けて働かない人のことです。さらにパウロはⅠテサロニケ4:11でも働くことの大切さを教えています。「11また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くことを名誉としなさい。」働くことは名誉あることなのです。

このようなパウロの労働についての教えは、実は聖書が教える労働観そのものなのです。創世記2:15にはこうあります。「神である主は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。」エデンの園は、アダムが何もせずのんびり過ごす所ではありませんでした。神はアダムに土地を耕させ、守らせるという仕事を与え、収穫した穀物や野菜、くだものを食べるようにさせたのです。また1:28でも神はアダムとエバに言われました。「生めよ。増えよ。地を満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」神は人にこの地を神のみこころにかなって治める仕事を与え、文化を形成するように命じられたのです。ですから、人間が働いて食物を得ることは神のみこころなのです。

その後、人は罪を犯し、エデンの園から追放され、仕事にも罪の影響が及ぶようになりました。そのため、仕事には苦しみが生じ、アダムは苦しんで大地から食物を得ることになりました。さらに労働も正しく管理しないと罪の影響下に置かれることになりました。劣悪な労働環境、働きすぎによる健康被害、仕事そのものが犯罪と関わるものもあります。日本では労働者を守るための法律があり、労働組合などもあります。ワークアンドライフバランスとも言われるようになりましたが、一人ひとり気をつけなければなりません。確かに仕事には苦労が尽きません。しかし、神の創造の時から、働くことは意味のあることで、人間は仕事を通して、神の栄光を現し、生活の必要を得、文化を形成するようにされているのです。働いて必要な物を得ることは神のみこころであり、名誉なことなのです。

パウロはこの聖書の労働観を、テサロニケ滞在中と第一の手紙の中で教えました。さらにパウロはテサロニケ滞在中に自ら模範を示して教えました。7-9「7どのように私たちを見習うべきか、あなたがた自身が知っているのです。あなたがたの間で、私たちは怠惰に暮らすことはなく、8 人からただでもらったパンを食べることもしませんでした。むしろ、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜昼、労し苦しみながら働きました。9私たちに権利がなかったからではなく、あなたがたが私たちを見習うように、身をもって模範を示すためでした。」

パウロの伝道は教会のないところに教会を建てる開拓伝道であり、そのため自給伝道をしていました。自分の必要のために働きながらみことばを伝え、教会を形成していったのです。もちろんパウロも諸教会からの支援を受けましたが、基本は自給伝道でした。パウロがそうしたのは、教会からの支援を受ける権利がなかったからではありません。使徒ですから、教会に経済的に支えられる権利がありました。Ⅰコリント9:14でパウロはこう言っています。「同じように主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活の支えを得るように定めておられます。」しかし、パウロは新しく信者になった人たちに労働の大切さを示すために、この権利を用いなかったのです。

パウロは怠惰に暮らすことなく夜昼、労し苦しみながら働き自分で得たパンを食べてテサロニケ教会に模範を示しました。このようにして神のみこころである労働の尊さを教えたのです。働くことは神のみこころであり幸いなことなのです。高齢になり引退しても、日常生活の仕事があり、さらにはクリスチャンには神への奉仕という働きがあります。働くことを通して、神の栄光を現し、教会を建て上げ、隣人に仕えていきましょう。

２．主の命令 １１－１２

第2の点では、働かずに怠惰な歩みをしている人に対する教えです。6節で「怠惰な歩みをして、私たちから受け継いだ教えに従わない兄弟」とありました。11節にさらにその人たちのことが記されています。「11ところが、あなたがたの中には、怠惰な歩みをしている人たち、何も仕事をせずにおせっかいばかり焼いている人たちがいると聞いています。」第1の手紙でも見ましたが、テサロニケ教会の一部の人は主がすでに再臨されたと思い込み、働く意味がないと考えて、働くことをやめ、怠惰な生活をしていたのです。彼らは収入がないので、教会や信徒からパンをもらって食べました。さらに仕事をせず時間があるので、おせっかいばかり焼いていました。おせっかいの元々の意味は、いたずらに動き回ることで、あっちの人、こっちの人のところに行き、余計なお世話をし、人に迷惑をかけていました。

パウロはそのことをテサロニケから帰って来たテモテから聞き、すでに第1の手紙で彼らに、「落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くことを名誉としなさい」と教えました。それでも彼らはパウロに聞こうとせず、依然として怠惰な生活をしていました。そこでパウロは第2の手紙で彼らに命じました。「12そのような人たちに、主イエス・キリストによって命じ、勧めます。落ち着いて仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。」落ち着いてとは、歩き回りおせっかいばかりしないという意味と共に、神に信頼してという意味があります。神に信頼して、神のみこころである仕事をしなさいということです。そして自分で得たパンを食べなさいと主イエス・キリストによって命じ、勧めました。「落ち着いて仕事をし、自分で得たパンを食べなさい」は主の命令なのです。そして主の命令に従うことは私たちにとって最善なのです。私たちも神に信頼して、今自分に与えられている働きを、感謝をもって行いましょう。

３．愛と厳しさ １３－１５

13-15節は教会における愛と厳しさの両方が教えられています。まず教会における愛のわざについてです。「13兄弟たち、あなたがたは、たゆまず良い働きをしなさい。」パウロは「働きたくない者は食べるな」と言い、さらに「落ち着いて仕事をし、自分で得たパンを食べなさい」と怠惰な歩みをしている人たちに命じました。それが神のみこころだからです。一方、教会には働きたくても働けない人たちがいました。病気の人、障害のある人、また夫に先立たれ家族など支える人がいない女性も、当時は働く場所がなかったため、教会の援助が必要でした。そのような人に対してはたゆまず良い働きとして愛のわざに励むようにと教えました。Ⅰテサロニケ1:3にあるように、テサロニケ教会は「愛から生まれた労苦」に励んでいました。ますますその愛のわざに励むようにということです。

次にパウロの教えに従わない人たちへの厳しい対応についてです。すでに6節で「怠惰な歩みをして、私たちから受け継いだ教えに従わない兄弟は、みな避けなさい」とパウロは主の名によって命じています。そのことをさらに14節で繰り返し言っています。「14もし、この手紙に書いた私たちのことばに従わない者がいれば、そのような人には注意を払い、交際しないようにしなさい。その人が恥じ入るようになるためです。」パウロはテサロニケ滞在中に教え、第1の手紙で教え、さらにこの第2の手紙でも教えました。それでもパウロの教えに従わず、働くことなく怠惰な生活を続ける人がいるなら、その人たちから離れ、交際しないようにしなさいと教会に命じました。教会員が彼らと交際しなくなれば、どうなるでしょうか。彼らは今までただでもらっていたパンをもらえなくなります。食べ物に困ると彼らの好きなおせっかいもできなくなります。彼らは恥じ入るようになり、自分の過ちに気づき、パウロの教え、聖書の教えに従うようになります。彼らが悔い改めるために、厳しく対応するのです。

もし、情に流されて彼らにパンをあげればどうなるでしょうか。彼らは恥じ入ることがなくなり、悔い改める機会を失い、結局は彼らのためにならないのです。ですから、厳しい対応は彼らのためでもあるのです。但し、厳しさの中にも愛が必要であるともパウロは教えています。「15しかし、敵とは見なさないで、兄弟として諭しなさい。」怠惰な人が来ても、交際せず、パンも与えないけれども、彼らは敵ではありません。イエスを救い主と信じる兄弟です。ですから、彼らが来たら兄弟として諭し、正しい道に歩むように勧めるのです。

教会の交わりには、愛と厳しさのバランスが必要です。通常は愛の交わりです。けれども、教会は聖書に根差す交わりですので、もし聖書から離れる方向に進んでいく人がいれば、その人を諭すために厳しい対応が必要になる場合があります。それはその人を兄弟姉妹と認めているためであり、その人が悔い改めて立ち返るためです。もし教会が聖書から離れる言動に目をつむり、或いはかわいそうだからと言ってその人に対して何もしないなら、そのような教会の交わりは聖書の土台から離れていくことになります。教会はどこまでも神のことばである聖書に従う交わりであることを覚えましょう。

箴言6:6には「怠け者よ、蟻のところへ行け。そのやり方を見て、知恵を得よ」とあります。蟻は夏のうちにせっせと働き食物を確保し、冬に備えます。神は人間にはさらに大切な働くことの意味を与えられました。それは働いて自分と家族の必要を得ること、仕事を通して神の栄光を現すこと、さらに与えられた収入を神と人のために用いることです。ローマ12:11には「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい」とあります。自分に与えられた働きを通して、勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えていきましょう。